

菰野町観光振興プラン(案)

菰野町

目 次

I. はじめに	1
II. 観光振興プランの位置づけと計画期間	2
1. プランの位置づけ.....	2
2. プランの計画期間.....	2
III. 観光を取り巻く状況と課題	3
1. 観光産業を取り巻く状況.....	3
2. 菰野町観光の課題.....	4
3. 観光地としての特性.....	5
IV. 理念と目標	6
1. 理 念.....	6
2. 目 標.....	6
V. 目標実現のための基本方針	8
1. 多様な観光ニーズへの対応.....	8
2. 地産地消と地域ブランドの創出.....	8
3. 交通対策と景観等の基盤整備.....	9
4. おもてなしの観光地づくり.....	9
5. 観光資源の広域ネットワーク化.....	9
6. 感染症予防と選ばれる観光地への取組.....	9
VI. 観光振興の取組方策	10
1-1. 地域資源の活用による魅力の創造と発信.....	10
1-2. ニューツーリズムへの対応.....	11
2-1. 地産地消と地域ブランドの創出.....	12
3-1. 交通対策.....	12
3-2. 景観整備.....	12
4-1. おもてなし意識の向上.....	13
4-2. おもてなし空間の整備.....	13
5-1. 観光資源の広域ネットワーク化.....	14
VII. 推進方策及び財源確保	15
1. アクションプログラムの作成.....	15
2. 実現を支える体制づくり.....	15
3. 観光振興に向けた財源の確保.....	15
参考資料.....	16

菰野町は、名古屋市から約 40kmの距離に位置し、一方で町域の約4割を標高 1,000mを超える山並みから構成される鈴鹿国定公園が占め、主峰の御在所岳山上へはロープウェイが運行し、眼下に広がる田園風景を眺めることができます。山麓の湯の山温泉街は温泉地として賑わい、登山、キャンプを楽しむ多くの方々が本町に訪れています。

平成 30 年には湯の山かもしか大橋が架橋され、平成 31 年3月には新名神高速道路の菰野インターチェンジの供用も開始されるなど交通インフラが整備されたことで、本町と湯の山温泉街へのアクセスが向上しました。豊かな自然景観や地域資源を有している本町では、これらを活かした観光産業は、主要な産業として位置づけられます。

また、観光は多様な業種がかかわる裾野の広い産業であり、観光入込者の消費行動は、これらの業種を元気にするとともに、新たな雇用の創出、地域経済の活性化へとつながります。観光産業は、農業、その他産業と連携を図ることで、より一層活性化し、町全体の活性化にもつながることが期待できます。

しかしながら、観光産業は、景気の影響を受けやすく、対象となる来訪者は国内外を問わず広範囲から訪れ、その観光目的も多様化していることから、常に観光動向を注視し続けることが必要です。

本プランは、観光振興を地方創生の要とし、地域づくりとまちづくりを一体としてとらえ、新たな観光産業の指針と今後の取組を示し、観光産業の担い手である関係者すべてが協働する推進体制を整理し策定するものです。

本町としては、観光振興のため、観光業者による観光商品やサービスの提供、販売の仕掛けづくりを、地域資源や観光プロジェクトの訴求ポイントを工夫しながら、情報発信を推進する枠組みの設定を目指します。

さて、令和2年には、新型コロナウイルスの感染症拡大を受け、観光に関連する産業は、全国的に実施された緊急事態宣言による移動の制限や外出自粛等により、直接的に大きな影響を受け、観光産業に限らず、社会全体に対し、新しい生活様式への対応が要求されています。

本プランにおいて、新しい生活様式への対応をしながら、観光業に及んだ感染症による大きな影響を克服することに対し、最優先で取り組み、本町の魅力ある地域資源を活用することで観光産業だけでなく町全体の活性化を目指します。

1. プランの位置づけ

本プランは、観光振興施策を総合的に展開していくための計画として策定したものです。

内容としては指針としての性格を持っていますが、第6次菰野町総合計画（計画期間：2021年度～2031年度）をはじめ、国や三重県、北勢圏域の関連計画との整合性を図りながら、本町の観光振興に関する内容を着実に実施していくための基本コンセプトや施策の方向性を示した個別計画として位置づけます。

2. プランの計画期間

本プランの計画期間は、平成21年から平成32年の12年間として策定された観光振興プランの次の計画期間となり、計画期間は令和3年度から令和7年度（2021年度～2025年度）の5年間としています。しかしながら、観光を取り巻く情勢の変化は激しいことから、それに対応できるよう適宜見直していくものとします。

1. 観光産業を取り巻く状況

(1) 近年の旅行者の特徴的な行動

近年の旅行者は、時代と共に価値観やライフスタイル、行動様式が変化することに伴い、会社の慰安旅行などの団体旅行が減少し、家族や友人、知人等と出かける個人、小グループ旅行が増加する傾向が見られます。

また、観光情報の入手が容易になり、パッケージ商品ではなく、個人の好みや興味、関心にあわせた行動が見られ、この結果、観光地は多様性だけではなく、個人のニーズに合致した個性的な取組が求められるようになってきています。

(2) 他業種からの観光産業への参入

観光の担い手は、かつては宿泊、飲食、土産物、交通といった観光事業者や公的機関でした。しかしながら、このごろは農業者や小売業者、製造業者、建設業者、NPO(特定非営利活動法人)など多様な分野からの参入が増えていきます。また、民泊など個人の参入も可能になりつつあります。

(3) 観光客入込み者数の推移

神宮式年遷宮があった平成 25 年には日帰りと宿泊を合わせた観光客入込み者数が約 300 万人でありましたが、湯の山温泉が開湯 1300 年を迎え、記念事業が開催された平成 30 年では、約 250 万人に減少、令和2年には、新型コロナウイルスの影響により約 175 万人と大きく減少しています。宿泊客のピークは、昭和 50 年代後半で、約 100 万人でした。この時と新型コロナウイルスの影響のなかった令和元年と比較すると4分の1となっており、来訪者を宿泊滞在につなげる観光施策の推進が求められています。

(4) 温泉地としての湯の山の沿革

山間の渓谷にある湯の山温泉は、四季折々の自然の表情が繊細に変わり、しかもそれを間近で見られることが他の温泉地との差別化となっています。昭和 34 年の御在所ロープウェイの開通は、標高 1,200mの世界に訪れる機会をすべての人に提供した点で画期的なことといえます。

昭和 50 年代には 30 軒を超える旅館があり、収容人員の合計は 2,500 人に達していましたが、現在では、ホテル、旅館は約半数に減少し、収容人数も約 1,700 人となっています。開湯 1300 年を迎えた湯の山温泉は、温泉街を中心として歴史や文化、伝統と風土を活かし、温泉資源を活用した湯治文化の復興に向け、湯の山かもしか大橋の架橋により繋がった周辺地域と連携した「湯の山温泉郷」として広がりを持った取組を進めることが必要であると考えます。

(5) 新型コロナウイルス感染症拡大による観光産業への影響

令和2年1月に日本国内で初めて確認された新型コロナウイルスは、全国に拡大し、緊急事態宣言による外出自粛、国内外の旅行や観光需要の激減、観光地や周辺地域の様々なまつりやイベントの中止に伴う消費の消失等により、本町を含め全国の観光関連産業が大きな打撃を受けました。

近年、アジア諸国からの訪日外国人旅行者が急増していましたが、感染症拡大の影響により、インバウンド需要は見込めなくなりました。そして、長距離移動のない近場の観光であるマイクロツーリズムとインバウンド回復のための取組が求められます。

2. 菰野町観光の課題

(1) 観光産業としての収益性の確保

観光が産業として成り立つためには収益の確保が必要です。しかし、来訪者の消費行動は必ずしも本町業者への収益確保に繋がっていません。

菰野町には、訪れる人を魅了する自然景観が多くあり、この魅力に気づいた人はリピーターとなって何度もこの地を訪ねてきています。そこで、自然環境を主たる資源として収益に結びつける仕組みづくりが求められています。

(2) 観光地としての雰囲気づくり

優れた自然景観のそばに廃屋が放置されていると、景観美を損ねることで楽しい気分が冷めてしまいます。また、地域住民にとっても環境衛生や防災、防犯上においても好ましくないものです。しかし、このような状況が残念ながら目に付きます。また、来訪者が観光情報を受け取ったり発信したりするのに必要な公衆無線 LAN 環境、食事をしたり休憩をとったりできる安らぎの施設が少ないために、来訪者の滞在時間が長くありません。菰野町の観光拠点である湯の山温泉、御在所ロープウェイとその周辺の景観整備だけでなく新たな魅力ある地域資源を活用した観光名所づくりを推進するとともに、観光客の安全安心を確保しつつ、快適な時間と場所を提供できる環境づくりを行うことが求められています。

(3) 連携と協働による魅力の創出

観光関係者はもとより、地域住民が来訪者を気持ちよく受け入れる、町全体から「おもてなし」の気持ちが伝わる意識づくりが必要です。また、観光事業者同士の連携や異分野、異業種との協働がまだまだ少ないので、互いに連携して新たな観光メニューを創出する取組が求められています。

(4) 新型コロナウイルス感染症拡大予防への対応

観光地や周辺地域では、コロナ禍における観光に対する意識が変わりました。一方で観光客は、団体旅行から家族旅行、都市圏から地方への旅行、短期的な近距離観光等の安全安心を第一に考えた旅行へと需要の変化が見られます。

こういった流れを踏まえ、個人による「三密」の回避、「人と人の距離の確保」「マスクの着用」「手指衛生」などの基本的な感染対策を踏まえた「新しい生活様式」の実践及び事業者におけるガイドラインに沿った感染防止対策の実施に加え、観光に対する意識や需要の変化にも対応できる体制が求められています。

3. 観光地としての特性

(1) 鈴鹿国定公園と田園、自然と歴史、文化の魅力

指定 50 周年を迎えた鈴鹿国定公園は花崗岩が隆起してできた山岳地であり、展望のきく景勝地に恵まれ、多様な動植物の生息とあいまって、自然の宝庫といえます。温泉保養地やキャンプ場、景勝地には毎年たくさんの方が訪れています。また、麓に広がる田園地帯はのどかな農村風景を演出しています。町内には、古くからの城下町としての伝統が残るほか、地域に伝わる民話や、湯の山温泉を訪れる文人達の足跡等、文化面でも多くの魅力を有しており、湯の山温泉、御在所岳、温泉の効能や僧兵、僧兵鍋、中部国際空港から一番近い雪山など、自然、歴史に育まれた豊富な地域資源を擁しています。

(2) 東海地方、近畿地方、北陸地方からの恵まれたアクセス

中部圏の中核である名古屋市から高速道路、鉄道を利用して約1時間で到着し、大阪市、京都市などの関西圏各都市へもアクセスしやすい場所にあります。さらに、新名神高速道路や東海環状自動車道が整備され、新名神高速道路の菰野インターチェンジが設置されたことで、東海地方はもとより近畿地方や北陸地方にわたる多様な都市との交流が期待されます。

(3) 継続した宣伝活動で築いた知名度

新型コロナウイルス感染症の影響の大きかった令和2年の1年で、約 175 万人の来訪者が菰野町の地を選んでいきます。この数字は、過去に取り組んできた宣伝活動の積み重ねの結果といえます。特に、名古屋圏と関西圏に向けては、御在所ロープウェイの建設以後、鉄道事業者等による宣伝事業の取組によるところが大きく、関西の奥座敷としての知名度を得るまでになりました。また、近年の登山ブーム、ロッククライミングの人気の高まりにより、登山者がリピーターとして多数訪れています。

1. 理念

歴史文化に育まれ、先人が守ってきた自然を次世代に引き継ぐため、水と空気のきれいな観光資源を宝と考え、この地で健康的で人にも環境にも優しい、持続可能な観光地を目指します。

2. 目標

観光産業を取り巻く状況や課題などを踏まえて、以下の目標を設定します。

(1) 鈴鹿国定公園や溪流を含む自然を活かした観光地づくり

鈴鹿国定公園、湯の山温泉、御在所ロープウェイ、キャンプ場等をポイントとして誘客しながら、鈴鹿山脈の懐に古くから受け継がれている、祭り、食文化、自然の恵みを再認識し、魅力ある観光資源として育てていきます。

(2) 農業や他産業と連携した観光振興

農村資源に付加価値を産み、観光資源化を図るとともに、地域内調達率を向上させ、既存観光資源と町内の多様な産業との連携により、観光需要と結びつける取組を推進します。また、異分野、異業種、他の自治体と連携した新たな観光メニューを創出する取組を推進していきます。

(3) 地域が一体となった「おもてなし」の観光地づくり

観光振興は観光業に携わる人だけでなく、町ぐるみでの取組が必要です。住民にもこの菰野町の良さを再認識していただき、わが町を知り、愛着を感じ誇りを持つことが、来訪者へのおもてなしの第一歩と考えます。地域の持つ魅力を発掘、創出、発信しながら、地域が一丸となって、来訪者と交流し、心から受け入れるおもてなしの観光地づくりを目指します。また、観光客が休憩できる施設や観光案内看板、公衆無線LAN環境を整備することで、観光客が快適な時間を過ごすことができるような空間を整備していきます。

(4) 観光地としての基盤整備

観光客の利便性や快適性を高めるために、交通事業者等と連携して交通対策を実施します。また、観光資源としての美しい自然景観を維持し、魅力を最大限に伝えるための関係者と協議しながら、景観保全に取り組みます。

(5) 広域連携による観光振興

本町単独での取組では観光資源の質量の面で限界があることから、北伊勢広域観光推進協議会が行っている北勢圏域全体で連携した取組や、三重県や三重県観光連盟など広域連携による観光振興に取り組みます。

また、民間事業者、他自治体との連携等、スケールメリットを活かした事業にも取り組むことで、誘客に繋がります。

(6) 新型コロナウイルス感染症の収束までの観光振興

今後の新型コロナウイルス感染症収束までの新たな観光振興の取組で必要となる要素は、新しい生活様式への転換と感染対策の徹底、オンラインによる観光情報発信の強化、分散型の安全で安心な観光の提供、新型コロナウイルス感染症収束後の観光振興を見据えた施策の展開であり、こういった要素を踏まえながら、収束までの感染予防及び観光に対する意識や需要の変化に対応できる体制づくりや取組を推進していきます。

また、観光関連産業が直面する課題だけでなく、新型コロナウイルス感染症収束後の新たなリスクに備えた仕組みづくり、さらに将来、インバウンドを含めた観光需要の回復期に備えた需要に応える取組についても支援していきます。

近年の観光ニーズは多様化し、自然や人とのふれあい、体験、健康等を意識した旅行形態に関心度が高くなっており、本町の豊かな自然や農産物を中心とした特産品など、歴史に育まれた特色ある地域資源を最大限に活用した関心度の高い観光商品の創出を進めます。

観光商品の開発、磨き上げには、一般社団法人菰野町観光協会、観光事業者、観光関係団体、交通事業者、行政それぞれが役割を担いつつ、他分野・異業種との連携も含めて協働の精神を持って取り組むことが必要であり、地域内調達を基本とした地域の経済循環の仕組みを構築し、観光の稼ぐ力を向上させ、「住んでよし」、「訪れてよし」の観光まちづくりに向けて地域自らが実践し、継続的に取り組むことにより、活性化が実感できる観光産業の振興施策を推進します。

1. 多様な観光ニーズへの対応

価値観の多様化や、旅行形態の変化に伴い、旅行者の観光ニーズもより少人数で目的性の高いものへと変化しています。このように多様化した現代の観光ニーズに対応すべく、地域特有の自然、伝統、旬といった魅力を引き出した観光コンテンツの創造や観光メニューを提供することが必要不可欠です。町内の多様な関係者、連携している自治体、大学などの機関と協力し、新たな観光資源の発掘に取り組みます。

2. 地産地消と地域ブランドの創出

地産地消は、地域内の経済好循環や環境負荷低減にも寄与するものと考えます。観光面においては、宿泊施設と地元農業者と連携した商品開発や歴史と文化のストーリー性を持たせるなど付加価値を付けた地域独自の食材や食文化を提供したり、情報として発信したりすることで、観光地としての価値が高められると考えます。したがって、地産地消活動を取り入れるとともに地域のブランドとして認知されるよう継続した取組により、第一次産業から第三次産業までを連関させた地域内調達率を向上させる仕組みづくりを目指します。また、食材供給が不安定となつては地域の特色ある食事を目当てに訪れた観光客の期待に応えられず、観光地としての魅力低下にもつながるため、安定的な供給システムの形成にも努めます。

3. 交通対策と景観等の基盤整備

行楽シーズンにおいて、訪れるお客様が快適でストレスなく目的地に到着できるような渋滞緩和などの交通対策を実施するとともに、マイカーでの来訪を減少させ、公共交通機関の利用促進を図ることで良好な観光地形成を図ります。また、観光資源としての美しい自然景観を維持して魅力を最大限に伝えるため、温泉街にある廃屋の整備や工作物の撤去、樹木等の剪定など景観保全に取り組みます。

4. おもてなしの観光地づくり

町全体でおもてなしして、菰野町の魅力を存分に感じてもらうことができれば、観光地としてのイメージアップにつながります。来訪者を心から受け入れる環境づくりを行うため、安全安心な食の提供、地域の魅力を伝える語り部、宿泊施設による細やかなおもてなし等、町全体で様々な主体が協働、連携することを通じて、おもてなしの向上を図ります。

5. 観光資源の広域ネットワーク化

自治体を跨いだ観光地間の連携が不十分であり、地域全体の魅力のアピールが弱いため、地域資源を結びつけた広域観光ルートの設定等により、地域全体の広域観光を促す必要があります。また、民間事業者とも積極的に連携することで、スケールメリットを活かした事業に取り組み、誘客に繋げていきます。

6. 感染症予防と選ばれる観光地への取組

感染拡大を予防するために、町内観光事業者とともに、これまで実施していた衛生管理に加え、基本的感染対策の徹底や施設内の消毒等、安全で安心できるサービスの提供に取り組むことが求められます。

菰野町では、三重県からのガイドライン等を活用した感染症予防のための取組を推進していきます。

さらに、観光需要の回復を見据え、選ばれる観光地としての土台を築くため、訪日外国人旅行者に対する研修会の開催、外国語併記のサイン看板の設置、Wi-Fi環境整備等インバウンド受入環境の整備に向けた取組を進め、SNS等を活用した誘客等の支援をします。

1-1.地域資源の活用による魅力の創造と発信

(1)農村資源の付加価値創造による観光資源化

新鮮な農産物は本町が擁する天然の資源そのものです。この農村資源は、安全安心の価値を付加することで観光資源となり、加工や直売等を行い、菰野町産の「食の観光」として来訪者等に提供します。提供する場所や方法を検討し、多くの方に活用してもらえるように努めます。

(2)農村資源を活かした観光拠点の創出

農村資源を活用した観光農園、体験農園など、新たな観光拠点の創出を図り、農業を地域の魅力として活かしていきます。

また、農産物等観光資源の販路が拡大し、魅力発信に繋がることが期待できることから、ふるさと納税の寄付者へ返礼品としての活用を検討、そして、直売所や道の駅整備について検討します。

(3)温泉資源の活用

湯の山温泉の温泉資源の特性や効能など知るとともに、それを活かした場を提供して多くの方に訪れてもらうように努めます。

(4)観光情報発信の強化

情報通信技術の高度化やSNSが普及し、旅行者の情報の取得方法や予約方法も大きく変化しており、これらの進化により観光旅行中の現地情報を充実することが必要となっていることから、Wi-Fi環境の整備を推進します。また、動画、映像を取り入れることによりわかりやすく魅力的な観光情報配信にも努めます。

1-2. ニューツーリズムへの対応

(1) ロングステイ(ワーケーション)の推進

少子高齢化等により、今後、旅行人口の大幅な増大が期待しにくい一方、団塊世代がシルバー世代へ移行し、健康寿命を延ばすことへの関心が高まっています。ワーケーション等に対応した取組を推進し、「温泉」、「健康食」、「森林浴」など、健康と観光を組み合わせた長期滞在型観光地の形成を進めます。

また、新型コロナウイルス感染症拡大などが影響し、密にならないアウトドア需要の増加への対応も進めます。

(2) エコツーリズムの推進

鈴鹿国定公園の豊かな自然を、観光資源の源とし、その環境を守りながら、四季折々の様々な魅力を紹介すべく、エコツーリズムを推進します。具体的には、地域による環境保全活動を前提に、地域のNPO等と協働しながら、自然の魅力や価値を伝え、環境学習が行える「自然学校」のような場を整備し、インストラクターやエコツアーガイドの育成を図ります。

(3) グリーンツーリズムの推進

菰野の原風景である農村の魅力を活かして、農業体験など、農業生産者と観光客とのふれあいなど、体験的要素を取り入れ、都市住民との交流を図るグリーンツーリズムを推進します。

(4) ヘルスツーリズムの推進

菰野町の豊かな自然、温泉を体感し、身体に優しい料理を味わうことで、来訪者が心身ともに癒され、健康を回復、増進、保持してもらうようなヘルスツーリズムを推進します。

(5) シネマツーリズムの推進

「男はつらいよ」のロケ地となった湯の山温泉などのロケ地を訪ねてもらい、その風景と食を堪能し、人々のおもてなしに触れ、その地域のファンとなってもらえるようなシネマツーリズムを推進します。また、ロケの誘致に力点を置いたフィルムコミッションの取組も支援します。

(6) スポーツツーリズムの推進

「鈴鹿山麓かもしかハーフマラソン」などの既存のスポーツ資源のほかにもスポーツの力が観光資源となる可能性も秘めています。スポーツをする、観る、支えるなどスポーツイベントの開催を通じ、交流促進、観光誘致につなげるスポーツツーリズムを推進します。

2-1. 地産地消と地域ブランドの創出

(1) 日本版DMOの主導による観光地づくり

「観光地経営」の視点に立って地域の多様な関係者と協力しながら観光地域づくりをするかじ取り役として、一般社団法人菰野町観光協会が日本版DMO候補法人に登録されました。着地型旅行商品の造成や販売、ランドオペレーター業務の実施など観光地域づくりの主体として事業を実施できるよう支援します。

(2) 菰野ブランドの開発

食は地域の観光的な魅力となることから、地域の食材や産品等、地域資源を活用して新たな商品の開発や見直しを行い、生産者、加工業者、販売業者と関係団体が協働して観光地菰野の商品づくりに取り組むとともに、宿泊施設等における販売、消費を促進します。

3-1. 交通対策

(1) 交通体系の整備

鉄道事業者やバス事業者と協働して、自然環境への負荷低減や行楽シーズン時の交通渋滞対策の一環として、公共交通機関の利用促進等についてPR活動を展開します。また、観光事業者が主体となって取り組む次世代移動サービスについて支援します。

(2) 渋滞対策

毎年紅葉の時期には、湯の山温泉へ向かう車で大規模な交通渋滞が発生することから、行楽シーズン時のパーク&バスライドの運用やマイカー規制など、自然環境に配慮した渋滞対策に取り組みます。

3-2. 景観整備

(1) 湯の山温泉街の整備

景観は、重要なおもてなしの表現の一つであることから、湯の山温泉街の景観整備として、廃屋の整備や撤去について、関係者と協議を行い、空家等対策の推進に関する特別措置法などによる対応を検討していくとともに、利活用が可能な空き店舗等については、改装、改修等の支援を行います。また、湯の山温泉街における景観ルールづくりなど、温泉街にふさわしい環境整備を推進します。

(2) 廃屋跡地の整備

廃屋が撤去された場合、その跡地については温泉街にふさわしい、地域の活性化やコミュニティ再生のために活用できるような整備となるよう、関係者と調整していきます。

4-1. おもてなし意識の向上

(1) おもてなし研修会等の実施

湯の山地域を支える観光事業者の従業員を対象とした研修会等を実施することで、地域の観光人材を育成し、観光推進体制の強化に取り組みます。

4-2. おもてなし空間の整備

(1) おもてなし処の開設と運営

来訪者の滞在時間を延ばすために、湯の山温泉涙坂の通りを中心として快適な時間を過ごすことができる施設の開設を検討し、観光地発信のオリジナル商品や菰野ブランドの商品、サービスの紹介、販売を行い、着地型観光等のニーズに対応する拠点とします。

(2) 観光案内サービスの充実

欲しい情報が得られるように観光案内サービスを充実させることで、訪れた観光客の満足度を向上させるとともに、菰野町の様々な観光資源や体験メニューなどの情報を提供することで、菰野町内を広域的に周遊できるようにします。

(3) 無料公衆無線LAN(無料Wi-Fiスポット)環境の整備

観光客、特に訪日観光客がスマートフォンやタブレットを使って滞在中に情報収集を円滑に行うことができるように、温泉街に無料公衆無線LAN(無料Wi-Fi)環境を整備して、満足度の向上やリピート率の上昇につなげます。

5-1. 観光資源の広域ネットワーク化

(1) 広域連携による観光資源のネットワーク化

観光客のニーズが多様化してきており、旅行行程が長期になればなるほど、1つの観光地だけで観光客を満足させることは難しくなることから、広域的に観光地を周遊させる必然性が生じます。三重県、近隣市町などと連携して、広域的に整合性のある観光施策を展開していきます。

(2) 企業や団体との連携による観光資源の活用

他の自治体や、町内の民間企業や団体と連携することでスケールメリットを活かしながら、企業や団体が持つインフラやノウハウ、情報を活用することで、多くの人を菰野町へ誘導する施策などに取り組みます。

1. アクションプログラムの作成

本プランの実現に向けて、各取組方策の重要度、優先度を検討した上で、計画期間(令和3年度～令和7年度の5年間)における時間軸を踏まえた新アクションプログラムを策定します。

2. 実現を支える体制づくり

本プランの実現を支える体制づくりとして、観光事業者、観光協会、行政が役割分担を明確にしなが、積極的な取組ができる体制づくりを進めます。

3. 観光振興に向けた財源の確保

地域の観光振興資金として入湯税を有効に活用しながら、本プランの具体化のために財源の確保に努めます。

<参考資料>

関連計画における菰野町観光の位置づけ

I.「第6次菰野町総合計画」(案)

観光の振興 ～まちの魅力を活かした観光の振興～

II.「三重県観光振興基本計画(令和2年度～5年度)」(2020年3月策定)

III.北勢地域における観光振興のあり方

北伊勢広域観光推進協議会では、平成20年5月に「北勢地域観光振興方策」を策定し、「立地の良さと多様な資源を活かし、いつ来てもさまざまな楽しみがある身近なレクリエーションの場として、訪れる人の好奇心を刺激し、観光産業を通じて、将来に希望と誇りの持てる地域社会」を北勢地域の目指す姿ととらえ、基本方針において、北勢地域を三重県の「北の玄関口」として、

- ①地域資源の掘り起こしと活用
- ②魅力を感じる観光地づくり
- ③人材の発掘と育成
- ④地域の特徴を活かした魅力ある情報発信

を柱として取り組むとしています。